

自分にできることをする

千代原真智子

二〇一一年前半は、私たちに衝撃的な記憶を残した東日本大震災があった。自分にできることを何かしたいという気持ちに駆られ、それぞれの方法で支援した人がたくさんいた。『ラーメンちゃん』（長谷川義史作 絵本館）の作者も子どもたちにエールを送りたいという思いが作者を石巻小学校に向わせ、読み聞かせの実践が作品化された。また、『つなみ』おばあちゃんの紙芝居―（田畑ヨシ作 山崎友子 監修 産経新聞社）は本来紙芝居が原作であるが、絵本として出版された作品である。著者自身が昭和三陸大津波に遭い母をなくした体験を紙芝居にし、昭和五四年以来、津波の怖さを語り継ぐ読み聞かせボランティアの活動をされてきた。八六歳の今年再び今回の津波に遭い家をなくされてい

る。高台の妹さんの家に逃れて助かった田畑さんは、震災後もまた読み聞かせボランティアを再開された。頭の下がる思いがする。

『津波！TSUNAMI！』（キミコ・カジカワ再話 エド・ヤング絵 グランママ社）は、二〇〇九年アメリカで出版された作品の日本語版である。切り絵のコラージュが津波の脅威を伝える。黒い海のかげが押し寄せる場面はぞっとする恐ろしさがある。『東日本大震災〇一・三・一一「あの日」のこと』（高橋邦典写真・文 ポプラ社）は大人の報道写真とは違い、人間に焦点を当てる著者らしい作品。人々の真っ直ぐな視線に人間の強さを感じる。『新幹線のたび』（コマヤスカン作 講談社）青森から鹿児島までの新幹線のルートを日本列島を太平洋側から鳥瞰するように描く。主人公が乗車している車内も下段に描かれ、臨場感も楽しめる。しかし、東日本大震災後三月二〇日の発行日と、東北の風景が最早過去の風景になってしまったことに深い感慨をもつて見入ってしまう。

『くらくてあかるいよる』（ジョン・ロッコ作 千葉茂樹訳 光村教育図書）は二〇〇三年八月北アメリカで起きた大規模停電の体験がもとになっている。家族であれ個人優先の普通の生活から、電気のない世界に放り込まれた家族は一つのテーブルに集まり、顔を見合わせ、星の美しさを再認識する。また、電気のない生活の不自由さに気づかされて